

解説・詩人論

大村孝子の詩業について

森 三紗

北の人びとの魂を賢治と共に語る人

鈴木 比佐雄

『大村孝子詩選集 一二四篇』を読んで

吉野 重雄

大村孝子の詩業について

——透明な抒情と慈みの心

森 三紗

大村孝子さんは、岩手県詩人クラブの重鎮で詩集『きおんな』『北のかんむり』『草のみち』『雪の夕暮れ』『ゆきあいの空』の五冊の詩集を持つ私の大先輩である。私は岩手の詩の芸術交流地帯の末席にいて、絶えず刺激を受け御教示をいただいていた。私は秋谷豊の「地球」、内川吉男の「火山弾」、吉野重雄の「堅香子」の同人として御一緒させて頂き、女流詩人として誠実な足跡をのこしていることに深い敬意を抱いてきた。いつかアンソロジーが刊行され、素晴らしい詩の世界を多くの人々が訪れることが出来ればと思っていた。このたび選詩集が発刊されることになり心から祝意を表したいと思う。

岩手県詩人クラブの芸術祭詩の大会や、吉野重雄さんの発案で毎年編集委員長八重樫哲さんや委員の努力で刊

行されているアンソロジー『いわての詩』の合評会においては、各自の詩の朗読の後合評が行われるわけであるが、大村さんは必ず参加し詩学や詩論が披歴され、詩にはみやびや彩があるべきだと、一歩も譲らない厳しさを持つて批評することがある。しかし、生活の経験をリアルに詠う日常茶飯事詩（生活詩）の持つ凛としたリアリズムを貫く詩も、実在することを認めていることはいうまでもない。

岩手の詩壇の歴史を顧みると、「Laの会」「鞍」「アリューション」の主宰者の大坪孝二の合評会は、大坪旅館で開催されていた。ある時、大村さんは歯に衣を着せず作品論が闘わされ、厳しい指摘に衝撃を受けてあまりの悔しさに、明治橋を渡るあたりで涙を流しながら、仙北町駅まで歩き花巻まで汽車で帰ったことがあると、私に苦労話をされたことがあった。詩の完成度にこだわり、推敲を重ねた透明な抒情性に富んだ作品を同人雑誌に投稿し、さらに詩集に編まれていく、努力の過程の根本にある逸話であると思う。

「アリューション」は昭和六十一年四月に復刊され

十五号で平成八年終刊。毎回合評会が開かれ「さりげない談笑の中に妙薬・劇薬が混入したりして、私はとまどいながらも心打たれたキラキラした硬質な言葉を今も忘れてはいない」と回顧。（詩誌「堅香子」第三号「寄せ書き」より）同人は合評会へ毎回全員参加していたという。それぞれの同人の作品を鑑賞し語り合い、豊かな時間を共有し、詩にかける真摯さと情熱が伝わってくる。

村野四郎は岩手日報詩の欄の選者を長らく務め、夕刊に投稿された詩を選び批評していた。投稿した詩が掲載されたときの喜びはなにもにもかえ難く、その励みとして詩作の契機とした詩人もおり、詩作を継続する源泉としていた詩人もいた。村野の硬質で独自の選評により、詩の本質や真実を学んでいたのである。村野は詩集『動物哀歌』を世に出した村上昭夫を発見し激励していたが、病める村上を地元で支えていた宮静枝と大坪孝二、それに続く詩人たちを「黄金地帯の詩人たち」と評していた。教師として教え子の死を体験するほどの衝撃的な悲しみはない。大村さんも北上川で教え子が溺死した深い悲しみを、これまでの短歌では詠み切れず詩として書き、

村野の詩の欄に投稿し、新聞に掲載され、それが生涯を決する励ましとなり、詩人としてのスタートとなったと思われる。その後投稿し掲載されたことが縁で村野の薫陶を受ける。村野は大村さんの依頼に答えて、『ゆきおんな』に美的な跋文を寄せている。大村さんは「村野四郎先生のお墓はどこですか」を書き行間から敬愛の心が読み出ている詩だ。

また戦前から岩手詩壇の指導者であった佐伯郁郎は、NHK盛岡放送局の企画で岩手の詩人たちを取り上げ、放送というメディアにより詩人たちを激励していた。局に投稿してくる詩が朗読され紹介をする際に、短い心の籠った批評がなされた。大村さんは師として仰ぎ、指導を真摯に受け止め、実作に生かして来たのである。平成二十四年、盛岡放送局はテレビで川柳のみを取り上げている。時間の関係かもしれないが偏っているように思う。戦前から平和と愛をモチーフに詩を書き、後に続く詩人に親切に対応して励まして来た宮静枝の自宅は、若き芸術家たちの芸術論を熱心に戦わせ詩の本質を話し合う「宮サロン」と呼ばれていた。大村さんも、村上昭夫、

前衛画家の村上善男、世界的に視覚詩で藤富保男と共に活躍する高橋昭八郎も集い、岩泉晶夫も常連であった。サロンの熱気が今も伝わって来るようだ。

慈眼、慈愛の透明な抒情詩人大村孝子の『ゆきおんな』を読んだのはいつであったのだろうか。私が少女の頃に、詩に目覚め、「詩集」とついた詩集を次々に読破していた頃、私の実家の寺の下の父森荘巳池（本名佐一）の書棚から取り出して読んだ。まるで物語か童話を読むように興味を持ち読み始めると「ゆきおんな」のいる雪の原野に感じることを感じ、魂が揺り動かされたことが昨日のことのように思いだされる。その詩集は雪女があたかも実在してこちらに語りかけてくるのであった。「ゆき」というタイトルの詩で始まっていた。「ゆきおんな」というタイトルに仕上がったのは何故であろうか。小泉八雲の「雪女」よりも、ゆきがつぎつぎ生み出されて降り積もり、死に至るまで狂わせる恐ろしい幻想譚が、まるで北国の冬が廻ってくる、囲炉裏端で語り継がれるように工夫され、物語性と音楽性に富んでいる。「ゆき」をモチーフにした詩を生涯にわたり美しく紡ぎ

大村さんは「地域からの発信」で岩手県の詩壇について当時の活動の様子をいきいきと表現していた。その描写力に驚いたのであった。「岩手日報」詩壇に熱心に投稿するこの詩人はどんな人であろうと、憧憬の念を持つていたのである。

大村さんは地域に根差して花巻詩の会を大切に育て、平成元年十月二十二日に佐々木義勝を講師に招き「戦前の岩手の詩人について」の講演会を開いている。驚いたことに『祭りのあと』にテープを起こし記録し、そのあとに、佐々木の提言で初めて高橋与惣吉に光をあて、自らの足で調査して隈なく遺族や関係者に取材し、生涯と詩の掲載誌や同人たちを調べて掲載。その後、それを契機に『暮れ残る空―高橋与惣吉略伝』を完成し刊行するのである。『花巻の詩覚書』ではその他に、梅野健造、加賀谷宏等、また精いっぱい生き詩作し歩んできた会の歴史や、『白楊』（諏訪道郎）を丁寧書きとめ、地元を愛して地元の詩人を熱心に顕彰し後輩を励まし愛情が深い。

地域に根差し宇宙・銀河意識を持った生き方をし、地

現代詩の高みにまでいたる原点である。「ゆき」「ゆきおんな」の平仮名での表記に限りない優美さとはかなさが感じられてならない。

前に述べたその書棚は昭和八年九月二十一日に宮沢賢治が家族の手厚い看病も叶わず身罷り、十歳年下の詩友佐一が形見として弟の宮沢清六からもらった大きな書棚であった。賢治の設計は非常に見事で、大工に特注し、詩集、文庫本や、新書、小説、辞書、百科事典、画集を整然と並べることが可能であった。その一段目、二段目に詩集が並んでおり、父は序文を依頼されると快く引き受け、近代文学研究家の浦田敬三は『森荘巳池序文集』の刊行を勧めたことがあった。『ゆきおんな』の他に佐伯郁郎や、「Laの会」の大坪孝二、吉田慶治、北川れい、岩泉晶夫、長尾登。「首輪」の三羽ガラスの斎藤彰吾、高橋昭八郎、渡邊眞吾、「愛なしで」で鮮烈デビューした中村俊亮などの詩集も置かれていた。

初めて大村さんのエッセイを読んだのは私の学生時代であった。大村さんには詩人の他に、文学的なエッセイストの顔がある。私は「現代詩手帖」を講読しており、

元の詩人をこよなく愛していた宮沢賢治のまぎれもない後継者としての生き方をして、私たちに詩人としての生き方と在り方を示し、文学作品を通して慈愛と透明な抒情の美しさを訴え続けているのである。（敬称略）

北の人びとの魂を賢治と共に語る人

『大村孝子詩選集一二四篇』に寄せて

鈴木 比佐雄

1

大村孝子さんの詩を通読していると、その世界があまりにも透明であり、魂の底までが掻き乱されて透かされてしまい、人間の裸の存在が露わにされてくる思いがする。詩作品にそんな力を持った詩人がいるとすれば、まず初めに宮沢賢治の名が想起されてくる。大村孝子さんの五冊の詩集と未収録詩篇には、間違いなく賢治につながる系譜が濃厚に感じられる。そして私はなぜか北の酷寒の山河・海辺に佇んでいて、ふるふる震えているような一人の存在者にされてしまうのだ。そのような意味で大村さんの詩篇は、外側から解説することを弾き飛ばしてしまふ詩的精神の内的な磁場の強さを持っている。自らの魂を内観することによってしか、大村さんの魂と同時に賢治を含めた北の人びと、その地に自生している動物、天地の在りよう全ての存在の震えを目撃すること

はできないだろう。だからこそ自らもその中で生きていけるのではないかと感じさせる、あまりに美しい存在の言葉なのだと感じられてしまう。幸運なことに私は父母や祖父母は福島であり、妻や妻の父母は秋田で私の親族の多くは東北出身であるので、よけいに大村さんの言葉の北の感受性が心の深層に響いてくるのかも知れない。

大村孝子さんは、一九二五年に賢治の故郷である花巻に生まれ育ち、教員となり定年まで勤められて、今も花巻に暮らして詩作を続けている。今回の詩選集には、今までに刊行した五冊の詩集の全ての詩篇が収録されている。一九六一年刊の『ゆきおんな』、一九八〇年刊の『北のかんむり』、一九八五年刊の『草のみち』、一九九六年刊の『雪の夕暮れに』、二〇一〇年刊の『ゆきあいの空』の五冊は、厳しい自然を抱えた北の国の詩人でしか書けない、寒さの中で生きざるを得ない人間たちの燃えるような静かな生きものたちへの共感と優しさが溢れだしてくる。賢治にも似た幻視力のような想像力によって、大村さんは多くの人や生きものたちの内

を代弁してしまうのだ。今回の詩文庫の出版に関しては、盛岡の詩人森三紗さんから推薦があった。大村孝子さんの詩集『ゆきおんな』は歴史に残る名詩集であり、それらを含めた大村さんの全貌を後世に残して欲しいとの助言だった。森三紗さんは賢治の親友だった森荘巳池の娘さんであり、今までも賢治の精神を私に直接的に伝えてくれているかけがえのない存在だ。それゆえ私は遙か遠くの賢治を愛する多くの人びとの魂から呼ばれている思いがしてきたのだ。大村さんの第一詩集『ゆきおんな』から紹介してみたい。

『ゆきおんな』は村野四郎の序文から始まり、十九篇の詩が収録されている。村野四郎は、「戦後詩特有の精神主義の責任」によって、私たちが「詩の肉体」を忘れていたのではないかと語っている。大村さんの詩には、そんな忘れられていた「詩の肉体」が甦ってきていると指摘する。さらに「こんなになまめかしくて痛々しい抒情詩を見たことがあります」との賛辞を記している。村野四郎の言葉は大村さんの詩的言語の本質を過不足なく言い当てている評言だと私は感じられた。冒頭の詩

「ゆき」の前半部分を引用する。

へおお 唄がのぼつてまいります
さやぎあう雪のかげのあいだから じずかにはだし
になり

へこのむらさきの肩かけをして
ゆきおんな 雪の中できものを脱ぐことはうつくし
い

くるおしいきもの あざむかれたきもの しらしら
と体じゅうの毛皮を脱ぎすてると ゆきおんな こ
いびとを食い殺した黒い壁画の王女のように 飢え
た空がそこで燃えている

降り積もる雪の中で、大村さんはこの世の音を無音にしてしまふ沈黙の雪の唄を聴いていたのだろうか。沈黙の果てから雪がこすれあい雪がさわぎあっている唄に耳を澄ましているのだろうか。すると雪の中に「ゆきおんな」が現れてくる。そして「雪の中できものを脱ぐこ

と」を始める。大村さんはその光景を目撃し、その美しさに見とれてしまう。その「きもの」は「くるおしいもの」であり、「あざむかれたもの」であり、「体じゅうの毛皮」である何か人間の業のようなものでもあるかも知れない。「ゆきおんな」は恋人を食い殺した王女の瞳が見た「飢えた空」のように静かに燃えているのだ。こんな雪を巡る想像力の広がりを読んで、私は北の女性詩人の獨創性に驚かされた。雪は「ゆきおんな」を生み出し、北の女性たちの心に住まう美しい魂の結晶であるだけでなく、北の国の女たちの悲しい定めのようなものを暗示している。「ゆき」の続きを引用してみる。

へゆきは

心せつない女のコーラス

へゆきは

すぎ去つてゆくおびたしい水死人

ゆきおんな 急になまめかしい鼓動を波打たせると
そらぞらしい一本の青いろうそくになる

このとき ゆきおんなの体には小さい靴がいつぱい
脱ぎすてられて みるみる寒暖計のようにあふれて
くる

雪は「女のコーラス」であり、「おびたしい水死人」であり、「一本の青いろうそく」である。そして「ゆきおんな」は雪をつぎつぎに孕みながら、最後には、自分が生んだ子どもたちの「小さな靴」で「体じゅう」が揉みくちやにされて消えていく存在なのだろう。この詩の最終連は次のように終わる。

雪がふかくなると ゆきおんな とてもきれいな
りながら気を失う ふとただよいの中から目ざめる
と いちめん白い炎になって 息するたびに痛みつ
づける みずからの とめどないのちのしげみに
おどろく

大村さんは雪に「とめどないのちのしげみ」を見出

してしまい、北の大地で生きる健気な女たちの魂の姿を「ゆきおんな」に重ねていくのだ。詩「雪のめるへん」では、年をとれば山へ捨てられるという「バナアさまのかなしい心」を刻む。詩「凍死」では、へ死んだら笛と埋めてくださいとかけた「女のたましい」を奏でる。詩「もだん・おとたちばな」では、北の海の「飢えたナイフの船唄」を聴き「女の魂」が抜きとられていくことを記している。詩「白の原型」では、「あの人の眼の中の天狼星」を探している。詩「もくれん忌」では、へしみとおるいのちを私は心すなおに花咲かねばならぬと語る木蓮の願いを語っている。詩「唄」では、あのひとの「シベリアの唄」である「鎮魂歌」が体に流れると「むげんにひろがる／たてごとになりたれい」と大村さんは願うのだ。詩「落葉のうた」では、晩秋の木に「生き残るといふことはなんといふことなのだろう」と「苦しみをわけあつてきた生命」に眩かせる。詩「山に入る」では、「ひととはひとの血を／あらわにのりこえて／いたましい存在のうただけが」今日に重なつてくることに聞き入っている。詩「火」では火を見つめながら「おまえ

はどこへかえる／わたしはどこへかえる」と問い続ける。詩「川が流れている」では、「しずかに／いのちを返してもゆくように」流れている川の命の輝きに気付いている。詩「いいえ秋はやっぱりさびしい」では、「秋は／決然と遠くをゆびさす季節なのだ」と考えている。詩「五月がきました」では、「うつむいていた雲は／あなただったのですか」と北の町の五月を賛美している。詩「るりまつり」では、「なぜか／むげんの空地をみるような／るりまつりの青い花／青い形象」を夢みている。詩「冬の少年」では、かつて教え子であった「あの冬の少年がうたう／うみなりの唄のひとふしが」心に響き渡るのだ。詩「悔恨」では、「わたしは一番好きな五十人の生徒を／明るい朝の講堂に連れ戻し／整列が悪いとなじった」ことを賢治の言葉と共に想起し続けるのだ。詩「山の絵を描く山の子どもたち」では、「がらんとしたふしぎなざわめき」が起り、「あの山の下に眠る祖先の血が」子どもたちに甦ってくる絵筆の動きを見ている。そして「あとがき」の冒頭では、「教え子が水死した昭和三十年の夏を機会に詩を書きはじめて以来五年半」と

記している。大村さんは三十代半ばでこの詩集『ゆきおんな』をきつと、水死した教え子の魂を鎮魂し、宮沢賢治と村野四郎とに感謝を込めて発行したに違いない。

2

第一詩集から二十年近くが経った一九八〇年に、第二詩集『北のかんむり』二十篇が刊行された。冒頭から四篇目に詩「夕鶴」がある。この「夕鶴」を読んでいると北の国の女たちの生きた命の証が込められているのだ気付くのだ。

夕鶴

あの一ひとにみんな あげてしまった
いちまい いちまい 羽をぬいては
ふるい歌といっしょに
ひろげた魂
ありったけ織りこんで
きれいな布 みんなあげてしまった

もう 何も無い

もう 何もいらぬ

時間からぬけだした

果てしなく青む盲目のなかを

とんでいった

うそだったろうか ひとの心

天空にかすむ空間はわきかえって

さざなみのように うすあかるく

見わけがたいひかり

あれはもう

雲のなげさか……

雪をともして近づくとひかり

吹き荒れておりたつ石ころの銀河

うそだったろうか

ただひとときを織った夕ぐれ

空ゆく雲もつばさを失って

つるは群青の虚空にしずんでいった

「夕鶴」と言えば木下順二の戯曲『夕鶴』が有名だが、もともになったのは柳田國男編集の『全国昔話記録』第一編『佐渡昔話集』の『鶴女房』だと言われている。それを踏まえて大村さんは書き記したのだが、私にはこの「夕鶴」という詩には戯曲や民話とはまた違った魅力が込められていると感じられた。「あの一ひと」は鶴を助けた男や翁ではなく、大村さんは利害損得に憑かれた人間存在そのものを指している気がする。すると鶴は利害を超えた純粹で聖なる存在であるかも知れない。人間はいつも純粹なもの、聖なる存在に試されているのに、いつも期待を裏切り「うそだったろうか ひとの心」と失望させてしまうのだろうか。そして鶴のような他者の幸せのために働く純粹で聖なる存在は、その純粹さゆえに失望し「群青の虚空にしずんでいった」のだろうか。大村さ

んの詩には、「ゆきおんな」のイメージもそうだったが、世に流布している人びとの中にイメージされてきた民話的なものに新たな意味を加えて更新しているように思われる。「夕鶴」という存在は、この詩によつて読み手の心の中に入り込み、新たに生き直す力を与えてくれるのではないだろうか。

その他の詩篇も何か心を掻き穿つような刻印を残していく。例えば詩「桜あかり」は、海辺の村のおぼろ月夜になると、伐られてしまった桜木の跡に「桜あかり」がたちさわぐ命のように闇の中で明らむのだ。詩「おしろい花」には、「おしろいを塗って たくさんの女が売られていった」というサブタイトルが付いていて、おしろい花を見つめている北の女たちの悲しい「歴史の残り火」を記している。詩「証言」は三部作「Ⅰ アカイ シソウ」、「Ⅱ ながい昼」、「Ⅲ 法廷に立つ」は、戦前戦後の東北を貫く「流餓の民」の思いを描いた力作だ。「すべてを遠く越えて／太陽は／北にこそひらかれねばなりません」と大村さんは北の大地の証言者と化している。

一九八五年に刊行した第三詩集『草のみち』二十六篇は、前半には独自の視点で花の魅力を染み入るように表現されている。例えば「きみどの花」などは花の想像力に生かされる人間のありかたを語っている。後半には、満州の特務機関で働いていた親友のN子さんの謎の死に触れた「十五夜のころ」、母の死に触れた「炎の中の母」、村野四郎への墓参りを描いた「村野四郎先生のお墓はどこですか」などの愛する者たちを偲んだ詩篇、ロシアの無名の人びとを悼んだ詩篇、大村さんの「退職」を記した詩篇などが収録されている。その中でも詩「ホメラレモセズ」と書き置いたのに、という詩が賢治の肉声を伝えているように感じられた。

「ホメラレモセズ」と書き置いたのに

「ホメラレモセズ」と書き置いたのに

絵ハガキだのチラシだの雑片累々

肩のマジエル星雲をゆすつて
賢治さんの星が涙ぐむ

おお なつかしいイーハトーヴの水仙月よ
雪どけに酔っていたのは やまなしの水源
五彩の空が恥ずかしかった なめとこ山の熊
けれど

このすがしい太陽系が濡れているのは
なぜだろう

声をなくした活字は さびしいね
まっすぐ墜ちていくのは

よだかか ゴーシユカ
刈りたての雲は どこへいった
大きな風の芯さえ

千切っては捨て 千切っては捨て
又三郎も売られて いったか

「ホメラレモセズ」と書き置いたのに
ページの奥がうるんで 何も見えない……

電波の燃えくずらも ちりちりと入り乱れ
寄ってたかつて萱ぶきの小屋を這いまわり
置き忘れなどないかと 探しよる
おまけに

新幹線さそり号まで調子にのって
ぼかん ぼかんと

習いたての銀河鉄道マーチなどふかしながら
ケンジ ケンジ とはやしたてる

肩にマジエル星雲をいただいて
水平無限の賢治さんの星がおりてくる

イギリス海岸の亀裂から アキカン噴きあげ
注文のない料理店は

なまぐさい酸素が蒸れるばかり
キシキシ鳴く風の突堤では

月夜のシグナルが赤信号を振っている

おお おお

霧ふかい逆流点に立つと

賢治さんの星が 鱗光を地平にうつして

赤く ゆつくり
傾いていくのが 見える

「ホメラレモセズ」と書き置いたのに……

この詩の中に出てくる「声をなくした活字は さびしいね」という一行が全てを物語っている。活字の中に肉声が響いていなければ、「さびしい」という大村さんの批評精神は、真に賢治の心が分かっているから、あえて現代の世相で賢治を利用して賢治を消費している活字や映像偏重に失望してしまったのだろう。またこのことは現代の詩人たちへの活字だけで詩を考えている詩作行為への違和感であり、根源的な批判としても読めると私には考えられた。賢治の精神を生かすことは、賢治を褒めそやすことではなく、賢治の愛した北の人びとの思いをいかに汲み取り、それによって生かされるのかという自

らの問題であることを大村さんは告げているように思われる。

一九九六年に刊行した第四詩集『雪の夕暮れに』二十三篇も、二〇一〇年に刊行した第五詩集『ゆきあいの空』二十六篇もまた、雪への思いをさらに色濃くしていく。第四詩集の「雪の夕暮れに」は、店先に捨てられていた葉っぱの中にあつた青い花から、「わたしはここにいます」と呼びかけられる詩だ。「消されたはずの一つのいのち」から見つめられてその花と対話していく詩篇はとても美しい時間の流れだ。第五詩集の「雪の音」では、破壊された「アフガニスタン バーミヤンの仏さま」に降りしきる雪を幻視している。「わたしは仏でありながら／苦しむ人びとを救えなかった」と仏に語らせる。そして「雪は人の心より暖かい」、「砕かれた仏様の悲しみがわかってくる」と大村さんは告げる。そして「世界中の境界線を／静かに消し去っている」と、雪の悲しみを独自の雪の想像力へと結晶させていくのだ。最後に私の最も好きな詩「宮沢賢治の投影による習作 2、朝日橋が木の橋だったころ―老いた船頭の語れる―」

を引用したい。賢治の生きた北上川にかかる朝日橋を見上げる船頭に成り代わって、大村さんが賢治と対話しているのだ。その小舟はいつしか銀河鉄道になって天と地をつないで銀河に旅立っていくのだ。大村さんの詩は、「とおい友だちすべてがここに帰ってほしい」と願う言葉語り、そして「北上川がまるで大きな楽器の輪のように」という詩行で締めくくっている。私は賢治の願いが大村さんのこの詩に結実していると思う。多くの北の国に心惹かれる人びと、北上川を愛する人びと、賢治を愛する人びとに大村孝子さんの詩篇の声を心で聴いて欲しいと願っている。

宮沢賢治の投影による習作

2、朝日橋が木の橋だったころ

―老いた船頭の語れる―

朝日橋が木の橋だったころ

北上川はよくしゃべっていたもんさ

岸辺のわすれなぐさや鳥たちと

たつぷりの川波もひだひだから笑いころげ
橋げたもまるで楽器の輪のように
ぐるぐる回って上機嫌さ

賢治さんだつて橋のまん中までくると

船頭さん、何かおもしろい話はないかね……

すると川波も喜んで勝手な揺れ方をする

私は急いで時間をとめる

あれはとても秘密の話なのだ

八月半ばの晴れた夜のことだった

いつのまにかマグノリアのような雲が

空いっぱい浮かび

りんごの匂いがあふれてくるのだ

血が霊気のようにざわめいてきた

するとぼんやり斜めに光っていた銀河が

まるで巨大な都市のように輝きながら

みるみる北上川に立ってしまつたのさ

たぎりおちる天球の光と

青白く流れる川面の銀河とが

直角に結ばれたその時だ

激しく暗いその折目の中へ

ころげ落ちる影のように

小舟が一そう乗り移っていった

おお 夢のような話ではないか

あの舟こそが銀河鉄道のはじまり……

すると

賢治さんはにわかに橋の上で跳びあがり

風のように向きを変えながら

まるで故郷を奏でる調子で

透明な地図の上を吹きすぎていったのだ

賢治さんが誰なのか私は知らない

まもなく木の橋は鉄に変わり

岸辺の茂みは消えて川波も笑わなくなった

橋の上には燈火があふれ

夜空はただけむって見えるばかりなのに

銀河鉄道の幻だけは

夜の気配に昼の光を重ねながら
りんごの匂いをまき散らして人びとを酔わせ
誰もが長い旅から帰ったような目つきで
夢うつつに賢治さんの名を呼びかわす

私は老いた

もうやめにする

願わくはあの夜のように

天と地が一つの銀河で結ばれたとき

透明な足あとを虚空にみたくして

とおい友だちすべてがここに帰ってほしい

そしてあのころのように

たつぷり流れる川波のひだひだから

ぐるぐる回って笑いこらげてほしい

北上川がまるで大きな楽器の輪のように――

* 朝日橋……花巻市内を流れる北上川にかかっている橋

* 斎藤文一博士（北上市出身、新潟大学教授、賢治研究家）

コールサック詩文庫7

『大村孝子詩選集 一二四篇』を読んで

吉野 重雄

大村孝子さんは、イーハトーブの詩人宮沢賢治と同郷の花巻の詩人である。

太平洋戦争で、東京から岩手の雪深い里沢内に疎開してきた私は、東に山道を五十キロほど越えたところに、大村さんが住んでおられたことなど知る由もなかった。終戦は国民学校の四年生、十歳の時であった。

略歴を拝見すると、そのころ大村さんは二十歳。男たちはみな戦地に取りられ、未だ復員して来てはいなかった。県立の花巻高等女学校を卒業されて、教職に就かれたころであったろうか。後年、私も同じ教職の道を辿っている。言ってみれば、先輩に後輩である。

共に岩手県詩人クラブに所属し、県内の詩誌「火山弾」の同人として肩を並べ、多くのことを教えていただいた。「火山弾」が終刊となってからは、同じメンバーを中心に結成された詩誌「堅香子」の仲間として活躍さ

によれば、夏の夜（八月十日、午後八時ごろ）朝日橋付近の北上川河畔に立って南面すれば、銀河系は天頂のあたりからほぼ垂直に立ち、北上川と合体する、「銀河鉄道の夜」はこうした天上と地上との合体交流である、と説かれる。

れ、現在に至っていることは嬉しい。

言い古された表現ではあるが、大村さんは戦前から戦中・戦後にかけて、昭和という時代をしっかりと歩み続けてきた詩人であり、まさに昭和の生き証人である。『大村孝子詩選集』には、その足跡がしっかりと刻み込まれている。

平成も二十四年。八十路に差し掛かった大村さんは、今何を思っているのだろう。そのことをこの詩選集から読み取り、時間の許す限り来し方行く末を語り合ってみたい。

大村さんの詩は決して華美ではない。巷間目にする多くの詩のように、肩を怒らせ他を批判し攻撃することに終始することもない。

選び抜かれた言葉を柔軟かつ縦横に駆使し、豊かな情感と想念を見事なまでにコントロールして綴られた詩は、汲めども尽きぬ泉のように、あるいは深い淵のように読者を惹き付けてやまない。それはそのまま大村さんの人柄を表しているように思われる。

☆（以下に引用した詩は、説明するために必要な部分だけを抽出している。許されぬことではあるが、紙幅の関係でそうさせていた。連や行など省略がある場所には*記号を付しておいた。本文と照合してご確認をお願い。）

〈ゆきは

心せつない女のコーラス〉

〈ゆきは

すぎ去つてゆくおびたしい水死人〉

*

ゆきおんな 雪をみこもり 雪はべつのゆきおんな
を生み ゆき ゆき

空を鳴らしてはげしく訴える心のように

*

「ゆき」（詩集『ゆきおんな』より）

ゆきおんなは大村さんの分身であろう。雪女とせず、

も、雪国で生まれ育ち、雪国で死んでいくものにとつては絵空事ではない。

詩選集の第一部にあたる詩集『ゆきおんな』に収められたこれらの詩は、雪とは縁のない南国に住む人たちをも、深々と雪国に誘い込む不思議な力を持つていよう。

北国の詩人、雪国の詩人、大村さんでなければ書けない詩であるといつて憚らない。

*

わたしは一番好きな五十人の生徒を
明るい朝の講堂に連れ戻し
整列が悪いとなじったのだ
鶏のようなぎすぎすした声をはりあげ
臆病な犬が遠くで吼えるように――

*

あゝ そのままで

わたしは

一時間後には秋草のうたを教える
音楽の先生にもなったのだ

「ゆきおんな」とした意味を考えてみたい。

私もかつて雪深い里に住み、囲炉裏の端で雪女の言い伝えに耳を傾けて育ち、何時か雪女のことを忘れて村を出た。

夕方だれかが凍死する

不気味な野原がどこかにある

死んだのは男か女か

山のひとも村のひとも

雪ぐつはいて見にきたそうだ

*

「凍死」（詩集『ゆきおんな』より）

一冬に何度か、あちらの村こちらの村で凍死した人の話を聞いた。何処のどれか分からない行き倒れもあったが、ドブロクを飲み過ぎて凍死した酒好きの爺様の話など、今も忘れることはない。

「ゆき」の中の雪女の話も、吹雪の夜の「凍死」の話

*

「雨の日だつてあるさ」と慰められ

「言うべきことは言うんだ」と力づけられ

でも「宮沢賢治先生は生徒を叱りませんでした」とさとされたような一行の言葉が
心に残る

あゝ 賢治の星祭りに行つて

やさしいうたをたくさん歌つてきたのは

昨夜のことだったのに――

*

「悔恨」（詩集『ゆきおんな』より）

ここには、教師としての大村さんがいる。賢治の里の子どもたちに音楽を教える、若くて熱い教師の大村さんがいる。

大村さんは「賢治」「賢治」と声高に語ることをしない。けれども、他の誰よりも賢治の生き方に惹かれ、その作品の世界に傾注していることは、第四部の詩集『雪の夕暮れに』などを繙くことで明らかになる。

そこには、「なめとこ山」「宮沢賢治の投影による習作」(1、アスパラガスの畑に)(2、朝日橋が木の橋だったころ)「風が」などの詩が収められている。彼女は、間違いなくイーハトーブの教師なのだ。

庭のあじさいが咲いた
風にゆれながら
ほの青むはなびらが はら はら 散った

老いた父はうずくまつて
散りしいた花びらを見ていた

もうじき 夏がくるね
すると 父がいった
ああ 今年も秋になるのか

その父が死んだ
あくる年のあじさいのころ

昏睡状態にあった母が
突然、うつすらと目をひらいた

刈りあげた頭には白髪がたよりなげに伸び
耳も 顎も 小さくなったね、かあさん
—もう春なんだよ

かあさんの畑も
いまにタンポポでいっぱいになるよ—

すると
わずかに開かれた目が コトリと動いた
みるみる黒味をおび
やがて 涙がたまった
この涙とも じき さよならの時がくる
かあさん

「タンポポ」(詩集『草のみち』より)

葬儀屋が父の棺に
木くずと新聞紙をつめた
私は泣きながら
そいつを丸めて投げすてた

露をふくんだ庭のあじさいで
父のまわりを飾ってやった

「あじさい」(詩集『北のかんむり』より)

体が不自由でさびしく激しかった父は、あじさいの花が好きだった。その父を送ってもう何年になるのだろうか。今年もあじさいの花が咲いた。

一人庭にたたずんで、あじさいの花を見つめる大村さんの姿がある。あの日父は何と向かいあっていたのだろう、父と同じことをしている自分に気づき、去りがたい気持ちになっている娘がいる。

冷たく晴れた三月のある朝

母との別れが間もなく来る予感。

タンポポの花を摘んだり、花輪を作ったりして母と遊んだ幼い日の記憶。長じて大村さんは町の高等女学校へ通っているが、何で通ったのだろう。自転車だろうか、それとも歩いてだろうか。『未収録詩篇』に収められた「チンチン電車の話」に出てくる、花巻駅から山の温泉まで田んぼの傍の道を走り続けた、ツートンカラーのモダンな電車でだろうか。

私は自転車で通っていたのだと、一人で決めてかかっている。タンポポが咲き乱れている田んぼや畑の中の道を、颯爽とペダルを踏んでいく大村さんの姿が目には浮かぶ。

タンポポは、お母さんの好きな花だったに違いない。そして、大村さんも大好きな花なのだろう。
「あじさい」「タンポポ」と、両親との別れを綴った詩に、深く心を打たれ黙祷した。

昔 私はこの花と同じ色をした
死亡通知書を受け取ったことがある

発信人「満州国、ハルビン市、特務機関」

用件 「あなたの友達のN子さんは、昭和二十年九

月二十日 病死しました」

私の手紙も紐でくくつてもどされた

女学校を卒業したばかりの同級生が

はるばる満州の謎多い特務機関で

一体、何をしていたんだろう

*

「十五夜のころ」（詩集『草のみち』より）

次は詩集『雪の夕暮れに』に収められた詩である。同じ友達のことを書いたと思われる詩が、他にもいくつある。

*

そのすずしさはノブコではないか

昔、お下髪のままハルビンにわたり

軍の機密機関でタイプを打ちながら

病死したと伝えられるノブコではないか

この国が敗れたとき

すでに祈りも届かぬとおい落日に

最期の涙を流して

あなたはあなたをどこへ脱ぎすてたか

語ってほしい

愚かしいことばであろうとも

*

「野の笛ひとつ」（詩集『雪の夕暮れに』より）

昭和十七年、A子は女学校卒業まもなく

突然私に別れを告げにきた

近くハルビンに行くの、何をしに？

束の間 微笑が消えて

今は言えない あとで手紙書くから…

胸の奥につめたい波紋がひろがり

その日から口をつぐんださびしい獣が

肋のあたりをさまようようになった

数か月たってA子から手紙がきた

（今は言えない）A子の住所は

「満州国、関東軍ハルピン特務機関」

*

「さんさんと心残りせよ」（詩集『ゆきあいの空』より）

女学校の同級生であったノブコが消えた道を辿る。ノ

ブコであったり、N子であったり、A子であったりして

いるが、戦争の犠牲となった友を捜し求める気持ちは今

も変わることがない。何度書いても書ききれず、またペ

ンをとることになるのが切ない。

先に大村さんは、肩を怒らせ他を批判し攻撃することに

に終始することはないと書いたが、それは飽くまでも表

面的なことであって、内面的な強さや激しさは、人一倍

のものがあることを知っている。

日中戦争から太平洋戦争へと拡大した戦火は、多くの尊い生命を奪い、全てを破壊し尽くして終わった。その

日から既に六十七年になるうとしている。戦争の体験を直接しているものは少なくなった。過ちは二度と繰り返してはならない。大村さんは、これから先も命の続く限りノブコのことを書き続けるに違いない。

この原稿を書いている今日（一月十七日）は、阪神淡路大震災の日から十七年目にあたり、東日本大震災は十ヶ月前のことになったと新聞やTVが報じていた。けれどもそれは決して過去のことではない。多くの詩人たちが競うように震災の詩を書いているが、書いても書いても書き尽くせないことを知っている。書き残さなければという思いは深い。

そうした中で大村さんは、私どもの詩誌「堅香子」十号に「春になったら」と「雌牛のモナリザ」という詩を寄せている。この詩選集に間に合うなら、是非とも載せて紹介したい詩である。

大村さんのことを、「昭和の生き証人」「北国の詩人」

「雪国の詩人」「イーハトーブの教師」などと勝手に名前をつけて呼んできた。許されるものならもう一つ、

「情熱と慈愛に満ちた詩人」という名前を進呈したい。
彼女が師事してきた村野四郎氏、佐伯郁郎氏、大坪孝
二氏、詩友ともいうべき村上昭夫氏、岩泉晶夫氏、内川
吉男氏、諏訪道郎氏など、幽明界を異にした詩人たちに
も、是非ともこの詩選集を届けたい。